



ラテンアメリカからアジアへ

世界を渡り歩く森林研究者が語るこれまでと、これから

ウィル・デ・ヨン教授退職記念インタビュー





森林は私の研究生活の中核を占めてきた。森林を構成しているものは何か、していないものは何か、それを問う。さまざまな森林の中に美しさと機能性がある。米国フロリダの松林。



仕事をしていたら、海を越え、大陸を越え、文化を越えた家族ができた。それは何よりも大切な天からの贈物。ペルーのイキトスにて家族でお出かけ。



ラテンアメリカからアジアへ

世界を渡り歩く森林研究者が語るこれまでと、これから

ウィル・デ・ヨン教授退職記念インタビュー

聞き手

藤澤 奈都穂 日本学術振興会特別研究員 CPD

村上 勇介 教授

町北 朋洋 准教授

(2020年12月7日、東南亭にて)

ウィル・デ・ヨン (Wil de Jong) 教授は、30年以上のキャリアの中で、一貫して現地の人々や社会を中核に据えた森林研究に取り組んできた。研究の焦点を天然資源や気候変動の問題に当てつつも、地域の実情を重視し、国内外の政策や法制度・社会制度などを視野に入れた、より広い枠組みでの研究にも挑戦している。ラテンアメリカやアジア、アフリカで研究を行い、世界中の森林に関する幅広い知識を持つ。これまでに研究者や NGO パートナー、国際機関など、世界の数多くの専門家との共同研究を実施している。

藤澤奈都穂 (藤澤) 私はパナマの森の小さなコミュニティの研究をしていますが、そこからグローバルな課題に寄与できるよう議論を展開することはなかなか難しいと感じています。そのこともあって、ウィルさんのご経験についておうかがいするのを楽しみにしていました。ウィルさんのお話は、私や他の研究者に今後の研究のヒントを与えてくれるものと思います。まずは、ご研究の原点についてお聞かせください。森林研究を選ばれた理由、当初の研究の目的、あ

るいは、動機はどのようなものでしたか。なぜ、ペルーのアマゾン地域を研究されたのでしょうか。この地域の何がそれほど魅力的だったのですか。

初期の研究とフィールドワーク

ウィル・デ・ヨン (ウィル) そうですね、それは私がオランダの地方の田舎の、とても小さな村で育ったことと関係があるでしょう。森がある地域に住んでいて、自宅



の前も後ろも森だったので、ほんの幼い頃から森で多くの時間を過ごし、自然や植物と関わっていました。11歳になる頃には、もうアルバイトで庭木を育てる農家の手伝いをしていました。それで、自分の進路を決める段になって、自分の研究分野はこれだと決意して、オランダで一番有名な農業大学に進みました。

大学での最初の一年間は基礎的なことを学び、二年目になって林学を専攻することに決め、主にオランダを中心とした林学を三年間勉強しました。その頃、初めての論文のためにフィールドワークをしたのですが、これがものすごく寒い雪の朝に、オランダの森で大小の木々を測るというものでした。さらに6カ月間のフィールドワークをしなければならなかったもので、それなら世界の他の地域も見てやろうと決めたのです。もうその頃にはラテンアメリカに行こうと決めていました。理由は、どうしても研究のためにラテンアメリカに行きたいというよりは、ラテンアメリカに行くのがカッコいいと思っていたからです。そこで、担当教授が私の行き先をペルーに見つけてくれました。今でも、1982年2月29日にオランダを発ったのを覚えています。これがその後のすべての出来事の始まりと思っています。なかなかない日付でし

よう、2月29日は4年に一度きりですから。

初めて飛行機に乗って、ペルーに行き、そこから自分自身のフィールドワークが始まりました。フィールドワークは6カ月間のはずでしたが、ペルーには6年も滞在することになり、その間はオランダには戻りませんでした。なぜかという、非常に魅力的なある林学者と一緒に働くことになったからです。彼は、森林の状況や変化についての研究に情熱をもっていて、同時に森林で暮らしている人々や、その森林管理の方法、森林との付き合い方にも、大きな関心を抱いていました。彼と一緒に仕事をするようになったおかげで、私はペルーの大都市イキトスだけでなく、コロンビアとペルーの国境にも行くことになりました。私たちはそこで現地の人たちと共に生活したり、働いたりしながら、彼らがどのように暮らし、森林を利用し、森林と付き合い、森林を管理しているのかを研究しました。そんな生活を3年ぐらい続け、私はこのテーマに猛烈な興味と情熱を抱くようになったのです。これが、私がこの分野に携わるようになった経緯です。

あともう一つ、大事なことがあります。それは、ペルーに到着した数週間後に、やがて妻になる女性と出会ったことです。彼女と知り合い、予定の6カ月の滞在期間を

終える頃には、帰国したくなる理由など、ほとんどありませんでした。仕事はとても気に入っていたし、妻に出会ってしまったのですから。

村上勇介（村上） 林学の学士号を取得された後に、哲学の学士号も取られたようですね。ご専門に加え、哲学の学位まで取ろうと思われたきっかけはどのようなものだったのでしょうか。

ウイル それは私の生い立ちと関係していると思います。私はオランダでカトリック教徒として育ち、人生のあらゆる問題について、例えば、生きるとは何ぞやというようなことを若い頃からずっと考えていました。ですから哲学的な文章を読むことには、学位を取る前からすでに興味を持っていました。それから、私が育った時代もあるでしょうね。1970年代というのは私が高校生から大学生だった頃で、当時の社会では、人生とか幸福とか、そういった問題がよく議論されていました。それに実を言うと、信じてもらえないかもしれませんが、林学を勉強していた頃、一時、少し飽きてしまった時期があったのです。飽きちゃったから、一年間、何か本当に興味が持てるようなことを勉強しようと決め、哲学を勉強したわけですが、これが非常に面白かった。ただ、その後でペルーに行って、自分の研究の中心テーマへの情熱をしっかりと取り戻しました。哲学を勉強したことで視野が広がったのは確かです。

藤澤 ペルーで研究されたのは民族植物学ですか？

ウイル 民族植物学と人類学の間、とでも言いましょうか。自分が一緒に働いている人たちのことを理解する必要があったのです。彼らの習慣や文化、ものの考え方、森林や自然を彼らがどのように語るか、彼らの生活や人生哲学の中で自然が果たす役割なども学ばなくてはなりません。例えば、彼らには自分たちの起源に関する物語があります。自分たちがどこから来て、どのように進化したのか……このような物語が人々の間で語り継がれており、その中では、自

然や森林、木々が非常に重要な役割を果たしています。私はこうしたことを現地で暮らす中で学んだのですが、これが実に面白くて夢中になってしまいました。

ペルーからインドネシアへ

藤澤 ペルーで10年ほど過ごされてから、研究の対象をアジア諸国、特にインドネシアにも広げられましたね。なぜでしょうか？

ウイル それは一緒に仕事をしていた人たちと関係しています。ペルーにいた頃、私の雇用先は、基本的に3つありました。まず、最初の2年半は現地の大学と仕事をし、その後の1年間は農業省に雇用されて全く同じ仕事をしていました。何をしていたのかというと、ペルーのアマゾンのさまざまな村に行き、地域での樹木の利用法や、在来のアグロフォレストリーを研究していたのです。そして、3つ目の仕事でニューヨーク植物園のスタッフと働くことになりました。植物園とペルーのパートナーとが現地で行う共同プロジェクトがあり、その下で2年間の研究をするべく雇われたのですが、これもやはり、アマゾンの別の場所での仕事でした。プロジェクトの終了後、雇い主だった女性が、私にニューヨークへ行くチャンスくれたので、私はペ



Natsuho Fujisawa

ルーのジャングルを離れ、ニューヨークという別のジャングルに行って3年ほど過ごすことになりました。ニューヨークで博士課程を修了しましたが、それまで一緒に仕事をしてきた同じ面々が、今度はインドネシアで新たなプロジェクトがあると誘ってくれ、何とか各方面から資金を調達して、私もインドネシアへ行きました。インドネシアでは、ボルネオの森林の奥地へ行って、またしても人々の森林の利用方法や、森林との関わり方、森林管理の方法を研究しながら、3年間暮らしました。

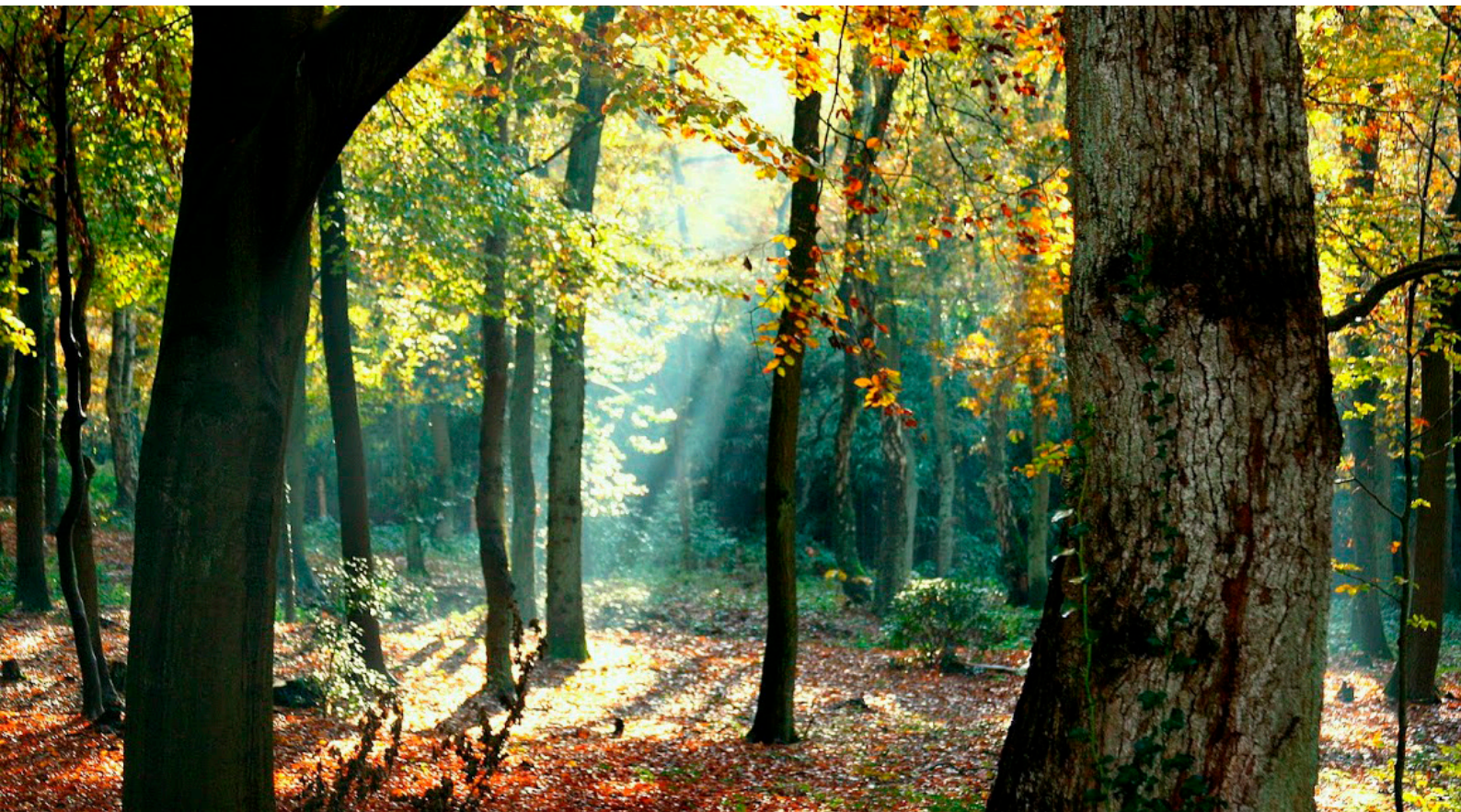
その頃には、森林で展開するさまざまな事態に対して政府の果たす役割が、インドネシアとペルーでは少し違うことがわかるようになっていました。インドネシアでは、政府が森林の開発や伐採を推進し、企業と協働して外国企業が森林に入ることを認めている事例を、ペルーよりもずっと多く見かけたのです。しかも、インドネシアの企業や政府は、地域の人々や彼らの森林と、非常に複雑な関わり方をしていました。インドネシアで働き始めて間もなく、森林開

発を促進するインドネシア政府の政策の問題点は、全て国際的な問題に関わりがあることが非常にはっきりしてきたので、国の政策と世界の動向の両方により目を向けるようになりました。また、人々や森林を近視眼的に観察するだけでなく、もっと多様なテーマや問題、疑問、プロセスの展開にも広く目を向けるようになりました。

藤澤 より広い視点に立たれたことで、インドネシアとラテンアメリカの政治構造の違いはいくつも見つかったのでしょうか。

ウイル はい、両者の政治は全く違っていました。一つ大きく違う点は、地域の人々の政治意識と政治的プレゼンスです。そもそも、ラテンアメリカ諸国の政府は、統制や支配の手法という面では、あまり強い政府ではなく、むしろ、ラテンアメリカのさまざまな社会集団のほうが、政治的プレゼンスを持っています。例えば、ラテンアメリカの先住民には独自の組織があります。もし政府の政策が先住民に悪影響を及ぼすようなら、彼らは立ち上がってデモ行進をするなど、とても積極的に意見を主張するでし





よう。そんなことはインドネシアでは見かけませんでした。地域の人々の政治的プレゼンスと、彼らに対する政府の見方は、アジアの多くの国とラテンアメリカとは非常に異なっています。少なくとも、私がインドネシアで仕事をしてきた1990年代の初頭は違いが際立っていました。

私がインドネシアに滞在したのは、1992年から2004年までの12年間でした。1990年代の終わりには、30年以上も大統領として君臨したスハルトが追放される事態となり、インドネシア全土で大きな政治的变化が巻き起こりました。それまで政府や権力者によって相当抑圧されていた国民が、以前よりもずっと積極的に発言するようになったのです。私がインドネシアにいた時期には、そういった政治的变化が先住民の間にも見られました。それまでの先住民は非常におとなしい存在でしたが、政治意識が高まって、彼らは以前よりもずっと意見を主張するようになりました。激動の時代でしたね。当時はインドネシアの大きな変化をいろいろ目の当たりにしたものです。

森林セクターにおける変化

藤澤 そのようなインドネシアでの政治状況の激変に際して、森林セクターにも何か変化はありましたか？

ウィル スハルトが追放された後、インドネシアの政情の変化と同時に、森林セクターでも国内外で一連の変化のプロセスが次々に生じるようになりました。その変化はインドネシアにも、アジアにもとどまらず、世界中で起きていたのです。まず、森林に対する考え方が変わりました。森林がどうなるかを誰が決めるべきか、森林はどうなるべきであり、どうなるべきでないか。さらに、誰が森林の所有者であるべきか、誰が森林に対する権利の所有者か——そうした考えに変化が生じました。もう一つの極めて重大な変化は、森林の重要性に対する人々の考え方です。これも、何年かの間で劇的に変わりました。私が初めてペルーへ行き、研究者としての仕事に取り組み始めたのは1980年代でした。当時、熱帯雨林の重要性に関する多くの議論の中心は、生物多様性や遺伝資源にとって、熱帯雨林が

いかに大切かということでした。長年の間、熱帯雨林の破壊を止めるための大変な努力がなされ、国際的な関心や運動も重ねられてきました。しかし1990年代になると、この問題にはすでに多額の費用が費やされているにもかかわらず大した変化がみられないと人々が感じ始め、世間の関心は、森林から遠のいてしまいました。

言うまでもなく、2000年代初頭以降は、一連の気候変動の問題が大きな国際問題になりました。今では、世界の森林が地上における最大の有機炭素の宝庫だということは周知の事実です。森林破壊や、その結果生じる炭素放出については多くの議論がありますが、熱帯雨林を含むすべての森林は大気中の炭素を最終的に吸収してくれるのであり、森林が吸収する炭素量は、毎年森林破壊により放出される炭素量よりも多いのです。そのように、地球規模の気候サイクルにおける森林の重要な役割や、森林に蓄えられた炭素の重要性が認められたことで、現在、森林に対する意識が再び大きく変わりました。

そもそも、我々のような森林研究者にとって、1980年代から1990年代初頭はいい時代だったので。森林研究者の存在が生物多様性の保護にとってとても重要だったからです。しかし1990年代には、忘れ去られてしまったかのように、ほとんど誰からも注目されなくなりました。それがまた、昨今状況が変わり、今では誰もが気候変動とそれに対する森林の役割の重要性を論じています。

地域の比較と森林再生

藤澤 気候変動のように地球規模の大きな問題に取り組む上で、ラテンアメリカとアジアの森林を比較するメリットは何でしょうか。

ウイル 森林と人々の関係性、人々の暮らしにおける森林の役割、気候変動における森林の役割について、ラテンアメリカ、アジア、そしてアフリカで生じている状況の類似点を認識することが重要です。ただし、世界各地で森林が減少しつつある根本的な原因、さまざまな問題とその背後に働く力、そして問題解決の可能性とそのため重点課題は地域によって大きく異なります。また、アジアのかなりの国が、一定程度効果的に森林破壊対策を講じてきたことに対する評価も大切だと思います。これらの国々で



は森林回復がかなり進んでいて、今やそれは森林研究に携わる者なら誰もが話題にするほど大きなテーマとなっています。

また、森林回復は森林研究者の重要なアジェンダであるだけではありません。世界中のさまざまな有力アクターが、森林や気候変動の問題に取り組むために森林回復に全力を注いでいます。さらに、ラテンアメリカとアジアの森林で生じていることを、より広い視点から眺めると、そこには重大な違いがあるのがわかります。森林を自然林も人工林も含む幅広い概念で捉えるなら、アジア大陸では2000年代初頭以降、すでに森林が増加し始めていました。国家単位でインドネシアやミャンマーなどではいまだに森林破壊があるとしても、アジア大陸全体で見れば、森林の合計面積は2000年代初頭から拡大しつつあるのです。その主な理由は、インド、フィリピン、中国、ベトナムなど多くの国々が、森林破壊対策の努力を積み重ね、森林回復の取り組みにも資本を重点的に投入してきたからです。

これに対して、ブラジルやペルーなどでは、森林破壊対策や森林回復の取り組みが、より一層困難なことがわかっています。例えば、ブラジルでは森林破壊に注目が集まり、我々のような森林問題に携わる者の多くは、これまでに数え切れないほどの会議や運動に参加してきました。以前、先住民の指導者に会った時には、彼らは「森を守らなければ」と言っていました。2000年代初頭から2015年半ばにかけてのかなりの長期間、ブラジルでは森林破壊は減少していました。依然として森林破壊は起きてはいましたが、それ以前よりも緩やかな速度で進行していたのです。ところが現在、この2～3年で、またブラジルの森林破壊は再び加速し、さらに深刻化しています。これは明らかに国策の問題です。つまり、ブラジル政府、ブラジル大統領の考え方が関係しているということです。もちろん、大統領は国民の大半から支持されているには違いありませんが、その政府や大統領が、自国にとっての重要事案をどう考えているかが森林破壊の深刻化と関係しているのです。その重要事案には、経済開発だけでなく、個人的な利益に関することも含まれま

す。例えば、ブラジルには金儲けしか望んでいない重要な経済セクターがあり、その金儲けの手法の一つは、熱帯雨林地帯へ行って、広大な森林区域の木を伐採し、そこで大豆を植えたり、家畜を育てたりすることです。ボルソナーロ現政権がこの3～4年の間にこの金儲けの手法を大いに奨励してきたことで、現在、ブラジルでは急速な森林破壊が進んでいるのです。このような事態はインド、中国、ベトナム、あるいはフィリピンなどのアジア諸国では見かけません。これらの国の政府は当然、農業生産や天然資源部門も含めて経済成長が必要だと認識していますが、しかし同時に、多くの理由から森林の存在が重要であり、保護されるべきだとも認識しています。これは何も、国家の国際的なイメージ戦略のためだけでも、国際的な公約を守ることによって気候変動対策の取り組みに貢献するためだけでもありません。森林が国家にとって重要だから、そのように認識しているのです。アジアには、森林の保護が国家に益するという意識があるように思います。

国際的なつながり

藤澤 ウィルさんのご研究は、特に京都に移られてから、世界の森林の実態を広く知らしめることに貢献してきたと思いますが、それについてはどうお考えですか。

ウィル これまで約35年間、研究に従事してきました。2004年に来日してからもそれは変わりませんし、研究をして論文を書くという仕事はとても好きです。京都に来てから、今まで行ったことのなかった国の人々とも、より多くのつながりを持つことができました。日本に来る前は、ベトナムやインドネシア、そしてアフリカでも少し仕事をしましたし、ボリビアやペルーでは何年も働いていました。日本に来て、これらの国での仕事は続けましたが、新たに中国やインドに関する仕事も始めました。そして、言うまでもなく、これらの仕事は非常に興味深いものでした。また、日本は魅力的な国ですから、日本に来られたこと、ここで生活して、この国を経験し、



日本について学び、日本が少し分かるようになったのは本当に嬉しいことでした。

インドと中国での仕事は、来日以来の私にとって特筆すべきことのひとつでした。この仕事を通じて、世界各地のさまざまな研究者との、あるいは彼らの間に、新たな関係を築くことができました。また2年前(2018年)には、ペルーの名高い古代インカ帝国の首都クスコで、あるワークショップを開催しました。このワークショップには、ラテンアメリカの人々に加え、中国や韓国からも参加者が来ていました。そこでは33の異なる文化を横断する共通の問題を議論しましたが、本当にすばらしいワークショップになりました。私の旧知の中国の友人もクスコに来ており、古代建築が連なるとても素敵なこの町と一緒に散歩したのですが、その道すがら彼は、ペルーについてどう思っているか、ペルーの抱える問題やその解決策についてなど、いろいろ話してくれました。このような経験や意見交換は、実にかげがえのないものでした。

また、中国やインド、その他のアジア諸

国の人々が集まるプロジェクトに参加したことで、インドの人々とも、つながりが出来ました。こうした国際的な関係が築けたことは、日本での研究生生活の賜物の一つです。また、ささやかながら、自分が日ごろ付き合っている仲間たちの間で、日本や日本研究について、そして日本における森林研究について、少しは情報提供できるようになったとも思います。彼らは私が日本に住み、働いていると知っていて、私の仕事について尋ねてくるので、この研究所を紹介することもあります。そのように日本と他の地域の研究者との橋渡しができたこともまた、日本と日本の学界を世界に広めるという点で、ささやかな成果の一部だと思っています。今後も一層、この活動を続けていくつもりです。

藤澤 そうですね、日本ではラテンアメリカの熱帯雨林について、特に社会面から研究している研究者は、ごく少数だと思います。ウィルさんは、私たちがこのテーマに日本で取り組むきっかけをくださったと思います。

最大のチャレンジと最大の喜び

藤澤 ご研究のなかで、あるいはよりプライベートな場面で、これまでで最大のチャレンジ、大変だったことは何でしょうか。また、一番楽しかったことは何でしょうか。

ウイル 大変だったこと？うーん、いくつかありますが……究極的には、多少は知られた研究者になってしまったことでしょうか。ペルーに行ったのは、私がオランダの学生だった頃でした。私はぶっきらぼうでしたが、謙虚な人間でしたから、その持って生まれた長所のおかげで、現地の環境に何とか馴染み、自分の仕事をこなし、友人も見つけることができました。人並みに浮き沈みはありましたが、そこそこ問題なく暮らしていました。ただ、研究者として、多少なりとも知られるようになると、結果的には経験やキャリア、名声のある人物として依頼や招待を受けるようになります。そして、徐々に増えてくるそのような機会に慣れ、自分の態度を改め、もう少し注意深く、世渡り上手に、たいそう抜け目なくならなければなりません。これはオランダから来た人間にとっては、簡単なことではありません。そんな気質など、オランダ人は持ち合わせていませんから。たぶん、この研究所の同僚の皆さんはお気づきかと思いますが（笑）。これには本当に慣れる必要がありました。そのような研究者としての立場と責任を自覚して、身を処することこそが、世界のさまざまな場所へ行き、その土地で暮らしながら働く、そんな、世界を渡り歩く研究者であるための、実に大きなチャレンジでした。

町北朋洋（町北） ウイルさんは最近、森林と持続可能な開発（SDGs）に関する書物を共同編集されましたが、複数の執筆者から各章の原稿を集め、1冊の本に編集する中で、何が一番大変でしたか。

ウイル 今回、私たちが手がけたのは、18章、600ページから成る本です。このような書籍の出版で一番大変なのは、執筆者に担当章



の原稿の締め切りを厳守してもらうことです。それが最大の困難ですね。ただし、一つ一つの章は、より大きな構想の一部でもあるので、かなりの時間をかけて、本の内容や趣旨、狙いについて、関係者全員がしっかりと考えを共有し、各章に要求されることを理解する必要があります。この作業には時間がかかります。不可能ではないけれど、一緒に作業するグループによって、事情はかなり異なってくるでしょう。このような本に取り掛かるには、最初に小さなグループを作ってアイデアを出し合い、各章の寄稿者を見つけますが、彼らもまた、各自で著者グループを作り、各章の執筆にあたります。本の趣旨や各章の役割を検討する過程では、十分な時間的ゆとり、考える機会と柔軟性をもち、色々なアイデアが取り入れられるようにします。最終的に、全員が納得する方向でプロジェクトを進めていくには実に時間がかかります。一旦、意見がまとまると、今度は、執筆者に各自の担当章を書き終えてもらうことが最大の難関です。大抵は編者が出ていって、執筆者にはっぱをかけ、最終的に原稿の仕上げまで付き合う羽目になるのです。現在、私は森林回復をテーマにした本の編者になっていて、数名の共著者ととも執筆にあたる寄稿者でもあります。実は、私たちの担当章の締め切りは11月30日（インタビューは12月7日）だったのですが、原稿はまだ提出できていません……自分がこの本の編者なのにね！これで、どれだけ大変か、おわかりいただけるでしょう？

藤澤 では、これまでで最大の喜びは何でしたか？

ウイル そうでしたね。これまでで最大の喜びだと特に最近実感しているのは、これだけいろいろな所に行き、暮らしてきたことで、各地に住む人々の様子や、ものの考え方、感じ方、行動や関係のあり方を見定められるようになったことです。1つの場所で過ごし、また別の場所で過ごすのに一から全部やり直す……すると、もう2度目には、現地に馴染む作法が身につけているのに気が付きます。現地の人々を理解するにはどうすればいいか、言葉や文化、人々の気質や、社会のルールを理解するには、どうすればいいのかがもう身についています。2つ目の場所に行く時には、一つ目の場所の経験の一切を携えて行くのですから、次にどこ

へ行こうか、その経験を活かして現地に馴染む、あるいは少なくとも、そこで暮らすことができるのです。3つ目4つ目の場所にも行くなら、経験や視野はさらに広がっていきます。時には、ふと気がつくこともあるでしょう、「確かに、これはスキルには違いないが、それだけではない、人間的な成長の経験でもある」と。実に、気づきがいのあることです。人生でこのような経験ができたこと、自分がこのようなキャリアを持てたということ、それがまさに、これまでで一番大きな喜びですね。

藤澤 ウイルさんに最も影響を与えた場所はどこですか。

ウイル 難しい質問ですね。ペルーに6年滞在した後、インドネシアで過ごした最初の半年ぐらいの間、私はまだ、ペルー文化に馴染んだオランダ人という感じでした。「なるほど、ここでは事情が違うんだ」と、心の底から理解する必要がありました。そこにどんな違いがあり、自分はその違いに合わせてどうふるまうべきかを誰かに聞かなくてはなりませんでした。最近ではオランダに行くとな、駅で電車が近づいてきて、人々があちこちに立って待っているのを見たりすると、「ああ、一体このカオスは何なんだ！」と思うのです。今では、日本の電車の乗り方にすっかり慣れてしまって、日本では皆お行儀よく、きちんと並ぶものだから、オランダがカオスかと思えてくるのですよ。

自分に最も影響を与えた場所は、やはりペルーでしょう。ペルーは、私が全くの異文化に初めてさらされた場所である上に、妻にも出会った国ですから。それほど、私のペルー生活は社会的にも文化的にも、非常に強烈な体験だったのです。でも、この日本で過ごした年月を振り返ると、今の自分が2004年来日した当時とは別人であることにも気が付きます。結局、どの場所も私をそれなりに変えてくれたということでしょうか。





今後の計画、東南アジア地域研究研究所と次世代研究者へのメッセージ

藤澤 ウィルさんはきっと、今後も積極的に熱帯雨林研究に取り組んでいかれると思います。ご研究の目標や今後の展望などについて教えてください。

ウィル まず、進行中のプロジェクトがいくつかあります。これまで、ウィーンに本部のある国際森林研究機関連合 (International Union of Forest Research Organizations, 以下、IUFRO) のメンバー・グループと一緒に仕事をしてきましたが、この組織のメンバーは世界中にいます。我々が取り組んでいる森林回復の一大プロジェクトは、基本的には今年 (2020年) 始まったものですが、この先何年も続いていくでしょう。

また、今後は教育にももう少し携わることができればと思っています。京都大学に来た頃に、国際プログラムの授業を担当しましたし、この5年間は中国人民大学の夏期講習も担当しています。もしチャンスがあれば、オランダか中国、あるいは日本の

どこかで授業を続けてみたいですね。学生たちと触れ合って、自分の経験を彼らと分かち合いたい、自分に起きた全てのことを彼らに聞いてもらいたいと思っています。

それから、日本の同僚とは今後も連絡を取り合い、一緒に仕事を続けたいと思っています。当研究所にとって、ラテンアメリカの環太平洋地域での研究を継続し、さらに拡大していくのは魅力的なことではないでしょうか。この研究所が持つ東南アジアに関する極めて豊富な経験や知識、ノウハウに、環太平洋地域を加え、これをより充実させることができれば、非常に素晴らしいと思います。ここでお話したことからもおわかりだと思いますが、東南アジアをラテンアメリカと比較する機会を持つことで、新たな気づきの契機が生じ、視野の広がりが期待できるからです。比較研究は、あるテーマを全く新たな手法で考えることを可能にしてくれます。なぜなら、世界各地で似たようなプロセスが生じていても、それらには独自の要因や現れ方があるからです。ですから、一つの研究所に、幅広い

Area Environments and Global Sustainability Challenges

"Area Environments and Global Sustainable Challenges" promotes research that links area studies with contemporary global environmental challenges. Contemporary sustainability challenges relevant for area studies include: climate change; global, regional, national and local food security; dwindling energy supply; degrading landscapes; loss of agricultural production capacity; declining rural livelihoods and loss of biodiversity. "Area Environments and Global Sustainable Challenges" assumes linkages between these global challenges and what is typically the focus of area studies. Contributing projects explore local and regional environmental dynamics that are relevant for global sustainability challenges.



専門知識を備えることができるとすれば、それは極めて有益なことだと思えます。今後も当研究所の取り組みが、ラテンアメリカ地域へと拡大、充実していくことを期待しています。

藤澤 最後に、ウィルさんは、熱帯雨林は持続可能な開発に大いに寄与する可能性があるとおっしゃいました。その可能性を高めるために、次世代の森林分野の研究者は何にフォーカスするべきでしょうか。若手世代、特に日本の若手研究者への提案や要望をぜひお聞かせください。

ウィル 国際的な森林研究にとって、ますます重要になり、今後いっそう活性化させる必要があるのは、優れた国際交流と国際共同研究です。そのために、研究者同士の関係や交流を見直し、改善していく必要があります。東南アジアでの研究者間の交流のあり方は、ヨーロッパやラテンアメリカとは異なっています。ラテンアメリカと北アメリカの研究者の間には、かなりユニークな交流やつながりがありますし、ヨーロッパの研究者は、研究者コミュニティに対する認識と信頼がより高いと感じます。ところが、アジアや東南アジアではまだ同じような状況にはなっていないといえますか、全員が一つの集団の成員として、同じレベルで対話することに信用を置くことができない状況があると思います。そうした状況は現在も進行していて、例えばアジアでは、気候の問題が政治的に非常にデリケートになることが依然としてあります。この問題をめぐって大小の影響力を持った勢力が存在し、政治的な思惑があり、研究者の対話のあり方にも、このような要素が影響を与えています。また、他国の例なども参照しながら、活発な交流を可能にするための素地を養い、訓練や教育を行う必要があるという問題もあると思います。研究者同士の対話のあり方や、会合の際に互いに抱く印象を改善することができれば、環境問題や森林破壊の対策に、いっそう多くの研究を役立てることができるでしょうし、ひいては森林そのものがさまざまな国際的課題に貢献し得ることを示すこともできるでしょう。

Sustainable Development Goals: Their Impacts on Forests and People

Edited by Pia Katila, Carol J. Pierce Colfer, Wil de Jong, Glenn Galloway, Pablo Pacheco and Georg Winkel

若手研究者、とりわけ、日本の若手研究者について言うと……おっと、ここからは言葉に十分気を付けなくてはイケませんね（笑）。最近、ヨーロッパのアジア国際森林研究の修士課程が優れたシステムを備えていることに注目しています。例えば、ヨーロッパのどの国から来た学生でも「持続可能な熱帯林学」の修士課程に入れば、一年間はある大学に通って、次の一年間はまた別の大学に通うことができるなど、さまざまな交流のための体制があるのです。もちろん、きちんとした仕組みを整えるのは簡単ではないでしょうが、それらのプログラムは、計り知れない成果を上げていますし、また、そうなるように作られているのです。プログラムの策定者は、学生がさまざまな場所に行くことを想定しています。そして、学生同士が話し合い、お互いを知り、ネットワークを作り、一つの大学の研究者や講師の下で学び、また遠く離れた別の大学の講師の下でも学ぶ、ということ想定しています。そのような学生は修士課程を修了する頃には、ただ学識が豊かなだけでなく、多様な人々が、多様な方法によってあるテーマを論じうることを十分に心得た人間となるでしょう。これは本当に貴重で有益なことだと思います。

ここアジアにも、これよりは小規模ですが類似の取り組みがあります。例えば、私の知るところでは、アジア太平洋地域の森林専門家に修士課程での研究を促そうとする組織が中国にあります。ヨーロッパのプログラムほど意欲的ではないにしても、そういう動きがアジアにもあるのです。もし、私がプログラムを作る機会に恵まれるなら、フィリピンやベトナム、ミャンマー（主に中国への留学生）だけでなく、韓国や日本も含めたアジア全域の学生を対象としたプログラムを作ります。学生には、さまざまな国に行き、半年か一年は一か所で研究し、その後は違う場所に行くようなプログラムに参加する機会を提供するでしょう。実現すれば、ものの見方を本当に広げてくれる機会となるはずですよ。このような機会は私の経験にも通じる場所があり、まったく違う場所に行ったとしても、自信を持てるようになります。最初の3カ月は状況がまったく分からなくても、いずれは分かるということ、そこで暮らし、仕事ができるようになるということが実感できるでしょう。そのようなプログラムを提案したいですね。きっと、とても有意義なプログラムになると思います。

町北 ウィルさんのフィールドでのマストギアは何ですか？いつもどんな物を持って行かれますか？

ウィル 以前は、旅の荷造りをする時に、私が最初にスーツケースに入れるのは、テニスラケットだと言っていました。でも、本当に大事なものは、コンピューター……それと自分の頭脳です。これがフィールドに持って行く、一番大切なものですね！





**Center for Southeast Asian Studies,
Kyoto University**

ラテンアメリカからアジアへー世界を渡り歩く森林研究者が語るこれまでと、これから
ウィル・デ・ヨン教授退職記念インタビュー

2021年3月25日

京都大学東南アジア地域研究研究所

〒606-8501 京都市左京区吉田下阿達町46

Tel: 075-753-7302 Fax: 075-753-7350